

グローバル支援の人類学：協力の人類史に向けて ：共同研究：NGO活動の現場に関する人類学的研究 ：グローバル支援の時代における新たな関係性への 視座（2011-2014）

著者	信田 敏宏
雑誌名	民博通信
巻	143
ページ	16-17
発行年	2013-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/5799

本研究会では、これまで「グローバル支援」や「パブリックスケープ」など、特定の話題について集中的に討議する場を設け、メンバーのあいだで認識や論点を共有してきた。こうした総合討議を繰り返すことにより、いくつかの軌道修正を伴いながらも、本研究会は確実にプラスの方向に進んでいる。本稿では、これまでの議論を整理し、今後の研究の方向性について提示してみたい。

グローバル支援

支援のグローバル化が進む時代にあって、NGO やボランティア団体、市民ネットワークや宗教ネットワークなどの非公式のアクターは、時には単独で、時には国家や国連などの公式のアクターと協力しながら、地域や国、民族やジェンダーなどの境界にとらわれない新しい支援活動を世界各地で展開している。

研究会発足当初、「グローバル支援」は、上記のような非公式のアクターを中心に地球規模で展開する支援活動を指していた。国境を越えて活動の場を広げている国際 NGO などを念頭において、従来の開発援助の時代とは違う新たな時代のキーワードとして「グローバル支援の時代」を捉えていたのである。

しかし、研究会開始当初から、上記の「グローバル支援」の定義に対して疑問が投げかけられていた。それは、「グローバル支援」が新たな造語である限り、現象を捉えるだけの言葉ではなく、そこに説得力を持ったさらなる意味を付与すべきであるとの要請でもあった。

こうした事情から、「グローバル支援」について総合討議を行ない、メンバーのあいだで認識を深めていく必要が出てきた。加藤剛（総合地球環境学研究所）による問題提起は、グローバル支援についてのメンバーの認識を大きく前進させるものであった。加藤は、グローバル支援はグローバルに展開する支援活動だけを意味するのではなく、普遍的でグローバルに受け入れられている価値やそれに基づいた活動にコミットする支援活動をも意味していると提起した。グローバルに受け入れられている価値とは、人権、環境保全、貧困、疾病、教育、災害、民主主義などであり、それらの課題を解決するために行なう支援活動を「グローバル支援」と位置づけたのである。こうした考え方は、その後、メンバーのあいだで共有されるようになっていった。

パブリックスケープ

次の総合討議の機会には、宇田川妙子（国立民族学博物館）や白川千尋（当時国立民族学博物館、現大阪大学）との「NGO 活動の現場」をより抽象化するための議論を踏まえて、筆者が「パブリックスケープ」という視座を提起することにした。それは以下のような問題提起であった。

グローバル支援の時代に入り、人類学のフィールドは大きく変貌してきている。1990 年代以降、NGO などの非公式のアクターは、人類学が研究のフィールドとする世界各地の周辺地域において様々な支援活動を行なっており、フィールドの人びともまた、NGO などの支援活動に参加しはじめ、血縁や地縁などで結びついた従来の関係性を越えて新たなネットワークを形成しつつある。支援活動に関わることで、人びとの生活や人間関係、自己認識や他者認識は大きな影響を受けるようになっており、人びとの世界認識も変容している。こうしたフィールドの変貌は、従来の応用人類学や開発人類学、ポストコロニアル論などの枠組みでは捉えきれない現象であり、新たな視座からの民族誌的再検討を必要としている。

現在、人文社会科学全般では、東西冷戦終結後の 1990 年代以降に再び脚光を浴びるようになった「市民社会」をはじめ、それに関連する「公共圏」「第三セクター」など、国家や市場、家族とは明確に区別された自律した個人が自発的に構成する社会空間をめぐって様々な議論が展開されている。その空間はさらにグローバルに拡大し「グローバル市民社会」を形成するとの予見がある一方で、非西洋世界では「市民社会」の概念を適用することができない現実が存在するなど、人類学からはこれら西洋起源の諸概念の限界も指摘されはじめている。そこで、「市民社会」「公共圏」「第三セクター」などの概念を批判的に検討する立場から、それらの概念を敢えて用いず、アパデュライの「スケープ（景観）論」を援用して、国際機関や国家機構などの公式のアクターや NGO やボランティアなどの非公式のアクターが介在し、人びとの関係性が変化し新たな形で活性化しているフィールドの状況を表現する概念として、「パブリックスケープ（公共景観）」という言葉も新たに創出し、用いることにしようと考えたのである。

マレーシア先住民オラン・アスリを事例に、「パブリックスケープ」の視座について具体的に説明してみよう。図 1 のように、家族や親族、そしてそうしたつながりで構成されている村や共同体が私的な・プライベートな空間として一方にあり、もう一方には、学校や行政などの国家的で公的とされる空間が存在している。オラン・アスリの場合、この 2 つの空間は、互いに密接に接して、そのあいだには、非公式のアクターも公共的な空間も何もないような状態が、長らく続いていた。しかし、1990 年代以降、グローバル支援を背景にした NGO などの非公式のアクターが介在する公共的な空間が、この 2 つの空間のあいだに生じるようになった。そして、これら非公式のアクターのあいだをつなぐネットワークは増殖し、それに伴ってこの空間はますます拡大するようになっていった。公共的な空間の広がり、場合によっては、公的なものや私的なものにも関わっている、はっきりとした領域を持つようなものではなく、アメーバのようにネットワークが広がっているとしか言えないようなものである（図 2）。「パブリックスケープ」とは、一言で言うと、この図 2 を

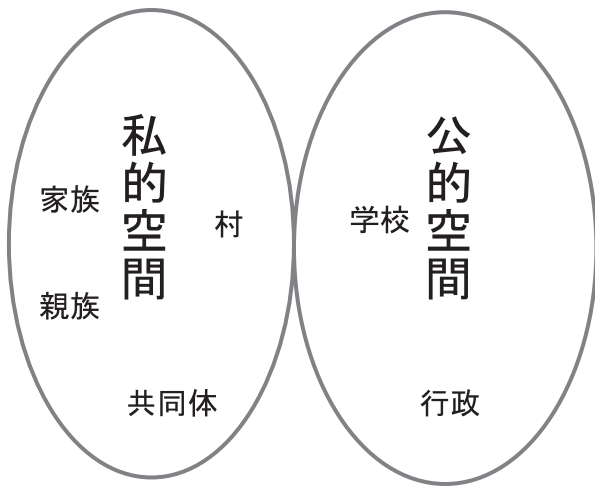


図1 私的空間と公的空間の概念図

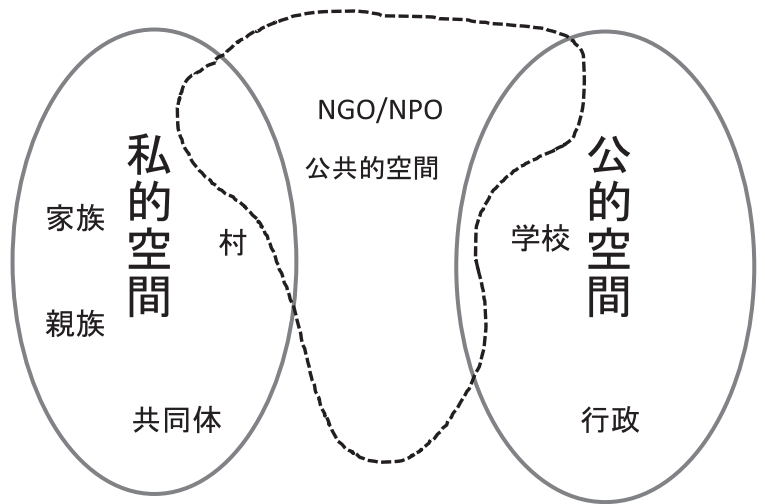


図2 公共的空間の広がり

全体的に捉えようとする視座を指している。

「パブリックスケープ」は、個々のアクターやそのネットワークを個別的・部分的に捉えるだけではなく、それらのアクターやネットワーク、そして人びとの動きをある具体的なアクターの視点から「一つの風景」として全体的に捉える総合的な視座を持っている。しかも、こうした具体的な視点や立場に立った視座を導入することは、「市民社会」「公共圏」「第三セクター」などの、西洋中心主義的かつ固定的で権威的になりがちな従来の議論とは大きく異なり、いわゆる多元的と呼ばれる現代社会を考える上で有効であるとともに、ミクロな手法を得意とする人類学の長所とも合致する。これらの点から、「パブリックスケープ」の人類学的研究は、「市民社会」「公共圏」「第三セクター」などの従来の議論をも西洋的なパブリックスケープの1つとして位置づけなおし、それらの議論を乗り越えながら、大きく変容するグローバル社会に関して新たな理論を構築していく可能性を秘めていると考えられる。

以上のような筆者による問題提起については、賛否両論があり、必ずしもメンバーのあいだで共有されていたとは言えない。しかしながら、「パブリックスケープ」を採用するか否かは別として、こうした議論を今後も続けていく必要性を感じている。

協力の人類史に向けて

以上がこれまでの議論をまとめたものである。最後に、今後の展望を少しだけ述べてみたい。それは、次なる研究プロジェクト「協力の人類史」への布石である。

約20万年前に誕生した現生人類（ホモサピエンス）は、世界中に拡散し、戦争や競争の時代を生きながらも、協力や助け合い、分かち合い（シェアリング）によって現在まで生きてきた。近年、考古学、霊長類学、脳科学、心理学などの分野で、人類がその進化の過程で受け継いできた「協力的行動（利他的行動）」や「分かち合い」への注目が高まっている。人類学においても、狩猟採集社会ばかりでなく、都市や農村においても、家族や親族の助け合いや協力的行動に対しては多くの研究蓄積がある。それゆえ、こうした研究領域に対

して、本研究会で議論している「グローバル支援の人類学」が貢献できる可能性は大いにある。なぜなら、グローバル支援というのは、近年になって現出した人類によるグローバルなレベルでの協力的行為と捉えることができるからである。

しかも、グローバル支援の人類学が従来の人類学研究と異なるのは、家族や親族などのミクロなレベルの助け合いだけでなく、インターネットなどによって現出しつつある新たな人間のイメージーションや人びとの関係性の変容、そして、それらに基づいた新しい人間観の出現、さらには他者意識や世界認識の変容といった地球規模のマクロな事象や現象にも着眼点を置いているからである。

近年、人の移動が容易になり現実の人間関係も国境を越える一方で、インターネットなどの電子メディアを介した人びとの相互作用もまた、ヴァーチャルな世界で加速度的に広がりを見せている。人や情報の様々な次元でのグローバルなフローが起きている状況のなかで、人間の新たなイメージーションは従来とは異なる協力関係を生み出している。グローバル支援の時代において、人びとは、身近な親族や仲間と協力するだけでなく、遠くの大陸に暮らす見知らぬ他者に対しても協力の手を差し伸べている。大げさに言えば、こうした現象はこれまでの人類の歴史のなかでは目にすることができなかったものである。今後は、人類史の新たな局面を探究するという立場から、人間の新たなイメージーションが生み出すグローバルな助け合いの形を視野に入れて研究を進めたいと考えている。

のぶた としひろ

国立民族学博物館文化資源研究センター准教授。専門は社会人類学、東南アジア研究。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした研究を行なっているが、最近では、NGO活動とコミュニティとの影響関係に関心を持ち、研究を進めている。著書に『周縁を生きる人びと—オラン・アスリの開発とイスラーム化』（京都大学学術出版会 2004年）、『ドリアン王国探訪記—マレーシア先住民の生きる世界』（臨川書店 2013年）など。